

2026 年度 横浜国立大学工学研究院等技術部 技術部報告会プログラム

報告会開催日 : 2026 年 9 月 17 日(木) 13:00 ~ 15:25 (受付開始 : 12:30)
会場 : 横浜国立大学 都市科学部講義棟 101 室および中央図書館 1 階情報ラウンジ
ポスターウェブ掲示 : 2026 年 9 月 11 日(金) 公開開始
技術部ウェブサイト : <https://tech.ynu.ac.jp/>

発表プログラム

■ 13:00~13:25 開会

13:00~13:01		開会宣言 小柴佑介 (報告会 WG 主査)
13:01~13:05		開会挨拶 跡部真人 (技術部長)
13:05~13:25	A0	機器・分析技術研究会がつなぐ技術者ネットワーク～技術研究会横浜国立大学初開催の意義と今後の展望～ ○岡安和人 (応用分析技術班)

■ 13:25~14:20 第 1 部 : 口頭発表 (発表 : 15 分, 質疑応答 : 4 分, 交代 : 1 分, † : オンデマンド)

13:25~13:40	A1†	FEM 強度解析や実験計測結果分析の自動化による技術支援について ○早川銀河 (計測制御技術班)
13:40~14:00	A2	学位を取って約 10 年間の振り返り:なぜ, どのように取って, 何が変わったか ○小柴佑介 (応用分析技術班)
14:00~14:20	A3	音より速い世界の話 ○山田千花 (計測制御技術班)

■ 14:20~14:35 休憩・ポスター掲示閲覧

P1	工学研究院等技術部における組織としての協働意識の醸成と情報系技術支援を軸とした大学運営業務連携の広がり 高橋 龍太郎 ¹ , 森康之 ² , 池田茂 ³ (¹ 技術長, ² 副技術長, ³ 情報・システム班)
P2	情報教育高度化に向けた教育推進機構との連携による学修支援システム構築と授業配信システム ESVOD 改修と機能拡張 池田茂 ¹ , 早川銀河 ² , 原山大 ² , 森康之 ³ (¹ 情報・システム班, ² 計測制御技術班, ³ 副技術長)
P3	学内 12 拠点の ROUTE 広報サイネージ更新に伴う抜本的なコスト削減と自律運用基盤の構築 池田茂 ¹ , 早川銀河 ² (¹ 情報・システム班, ² 計測制御技術班)

P4	8 部局の広報ウェブサイト運用を支える技術職員の業務と情報システム開発運用および生成 AI 活用による合理化 池田茂 ¹ , 瀬尾明香 ¹ , 畠中雄一 ² , 篠原維 ³ , 原山大 ² , 今村しおり ¹ , 正木佳代子 ² , 古川宏之 ⁴ (¹ 情報・システム班, ² 計測制御技術班, ³ 応用加工技術班, ⁴ 応用分析技術班)
P5	事務職員と技術職員の職協働による大学院入試情報発信業務の省力化と拡充 瀬尾明香 ¹ , 池田茂 ¹ , 櫻井瑠衣 ² , 片田菜月 ² (¹ 情報・システム班, ² 理工学系教務課理工学府係)

■ 14:35～15:15 第 2 部：口頭発表（発表：15 分，質疑応答：4 分，交代：1 分）

14:35～14:55	A4	Natech リスクがある建物への大地震直後における再入棟行動：開発教材活用の試み ○小柴佑介（応用分析技術班）
14:55～15:15	A5	大学間技術系職員交流研修会・化学系ワークショップ報告～研修会による他大学の技術業務の体感学習～ ○古川宏之 ¹ , 岡安和人 ¹ , 小柴佑介 ¹ , 和久井健司 ¹ , 原山大 ² , 山田千花 ² , 森下豊 ² , 寺尾喬 ³ , 池田茂 ⁴ , 佐々木茉莉 ⁴ , 森康之 ⁵ (¹ 応用分析技術班, ² 計測制御技術班, ³ 応用加工技術班, ⁴ 情報・システム班, ⁵ 副技術長)

■ 15:15～15:25 閉会

15:15～15:20	総評 跡部真人（技術部長）
15:20～15:25	閉会宣言 高橋龍太郎（技術長）

・口頭発表の概要

A0

機器・分析技術研究会がつなぐ技術者ネットワーク～技術研究会の横浜国立大学初開催の意義と今後の展望～

○岡安和人

機器・分析技術研究会は、国立大学法人等に所属する技術系職員が技術研究の発表や討論を通じて技術の研鑽・向上を図り、さらには相互の交流と協力により、学術振興における技術支援に寄与することを目的として毎年全国各地の大学等において 9 月初旬に開催されている。本報告では技術研究会の概要を紹介するとともに横浜国立大学で初めて開催する意義、実行委員会の準備状況、さらには開催を通じて期待される成果について報告する。

A1

FEM 強度解析や実験計測結果分析の自動化による技術支援について

○早川銀河

これまで技術支援として、FEM 強度解析や実験計測結果分析の自動化に取り組んできた。解析・分析を自動化する仕組みやプログラムを構築することで、学生だけでは困難だった大規模な解析・分析を実現した。その結果、ビッグデータを用いた統計モデルや AI モデルの構築、高度なシミュレーション・実験計測結果分析を実現した。本発表では、これらの事例を紹介し、自動化による技術支援が学生の研究の高度化に果たす役割を考察する。

A2

学位を取って約 10 年間の振り返り：なぜ、どのように取って、何が変わったか

○小柴佑介

EPOCH では、大学研究力を強化できる高度人材としての技術系職員が希求されている。本報では高度人材の増加に資することを目的として、演者が学位を取った経緯および取得後に変化したことを共有する。結論としては、能力および時間が許す限り、自身の能力開発の点で技術系職員が学位取得を目指した方が良い。

A3

音より速い世界の話

○山田千花

かつて商業利用された超音速旅客機コンコルドは、ソニックブームの影響により運航に大きな制約を受けた。しかし今年 6 月には低ソニックブーム型超音速実験機 x-59 の超音速飛行が成功するなど、近年再び超音速機開発が活発化し、衝撃波研究への関心が高まっている。本発表では衝撃波の基本原理を解説するとともに、自身の卒業研究を例に弾道飛行装置や光学計測手法など、衝撃波研究の代表的な実験技術について紹介する。

A4

Natech リスクがある建物への大地震直後における再入棟行動：開発教材活用の試み

○小柴佑介

熊本地震で顕在化した通り、大地震直後における Natech リスクを有する建物への再入棟は不安全行動である。これを防止する独自開発の防災教材を用いて教育実践を行った結果、単に教材を読むだけではなく、グループディスカッションを組み合わせることで、意識変容および学習転移が生じることを明らかにした。得られた知見は、防災教育の改善のみならず、大地震時の二次被害の低減に資する。

A5

大学間技術系職員交流研修会・化学系ワークショップ報告～研修会による他大学の技術業務の体感学習～

○古川宏之、岡安和人、小柴佑介、和久井健司、原山大、森下豊、山田千花、寺尾喬、池田茂、佐々木茉莉、森康之

大学間技術系職員交流研修会は、関東近県の大学の技術系職員が集まり大学の枠を超えた交流と、職能向上を目指す研修会である。講演聴講・施設見学・討論・発表・実習等を行っている。化学系ワークショップは化学系に特化した研修会で、講演聴講・実験を行っている。両研修会により、他大学の技術系職員の方々と人脈が出来たことや他大学での業務状況等を知り自身の業務において改善等を行うノウハウを得られた。

・ポスター掲示の概要

P1

工学研究院等技術部における組織としての協働意識の醸成と情報系技術支援を軸とした大学運営業務連携の広がり

高橋龍太郎、森康之、池田茂

本学の工学研究院等技術部の技術職員は、法人化以前は特定の研究室等に分散配置され、横のつながりや事務部との連携がなかった。そこで 2004 年より部局からの技術相談や依頼を受ける体制へ移行し、さらに部局の枠を越えて協働する組織へ転換し、全学事業や学内委員会へ参画した。その結果、情報系技術支援を軸に連携先が全学へ広がり、教育・研究・運営の技術基盤を担う組織として定着した。本取組は大学の持続的発展に資する。

P2

情報教育高度化に向けた教育推進機構との連携による学修支援システム構築と授業配信システム ESVOD 改修と機能拡張

池田茂，早川銀河，原山大，森康之

情報教育高度化に向け，2024 年度末の教育推進機構からの技術相談を経て，2025 年度に正式な業務依頼を受け，学修支援システムの技術仕様策定・構築支援を実施した。連携する授業配信システム ESVOD については，認証方式の変更，動画配信プレイヤーの外部連携対応，1,800 名規模の同時視聴に耐える配信基盤の性能改善を行い，ESVOD V2 として 2026 年 4 月より運用を開始した。

P3

学内 12 拠点の ROUTE 広報サイネージ更新に伴う抜本的なコスト削減と自律運用基盤の構築

池田茂，早川銀河

学部生が最先端研究に挑む「ROUTE」の魅力を全学へ届ける学内 12 拠点のサイネージが，老朽化に伴う一斉更新の時期を迎えている。既製品導入による高額な費用を回避するため，本計画では市販の小型端末を活用した独自の配信システムへ刷新する。圧倒的な低コストでの全面リプレイスを実現するとともに，電源管理等の運用自動化を図り，未来の研究者を育む重要な広報網をコストと労力の両面から抜本的に最適化する。

P4

8 部局の広報ウェブサイト運用を支える技術職員の業務と情報システム開発運用および生成 AI 活用による合理化

池田茂，瀬尾明香，畠中雄一，篠原維，原山大，今村しおり，正木佳代子，古川宏之

大学の広報ウェブサイトは部局ごとに整備が進み，8 部局分の運用を事務職員と技術職員が専門性を分担して担っている。この体制を継続するため，業務の標準化と省力化を目的に，情報システムの開発・運用および生成 AI の活用に取り組んでいる。その結果，情報更新や公開業務にワンストップで対応できる仕組みを実現し，ウェブ制作や点検の工数削減も加速度的に進んでいる。人的負担を抑えた発信体制を維持する方策として有効である。

P5

事務職員と技術職員の職職協働による大学院入試情報発信業務の省力化と拡充

瀬尾明香，池田茂，櫻井瑠衣，片田菜月

大学院志願者への入試情報公開は，理工学系教務課理工学府係と工学研究院等技術部が手作業と目視確認により行ってきたが，正確性の確保と作業負担軽減の両立が課題であった。両者が連携し情報発信を仕組み化するシステムを構築した結果，運用の大幅な省力化を実現するとともに，双方の視点から発信内容を見直し，情報提供の充実を図った。本取り組みは，事務職員と技術職員の協働による業務改善の一例として今後の展開にも資する。